

生きた作品を

大橋 敦子

まず、歴史上よく知られている事例として松尾芭蕉の、
大井川 浪に塵なし夏の月
白菊の目に立てて見る塵もなし
の二句について、芭蕉は大阪で病床にあったのだが、亡くなる三日
前枕頭に去来を招き、くだんの二句は題材は違いますが、「塵なし」と
いう言葉が気にかかる。同案だと見られるかもしれない、とし「大
井川」の句を、

清滝や波に散り込む青松葉

と改め、この句を忘れないように書き留めておいて野明のところに
残しておいた草稿は破りすててもらいたい、と類想について非常に
厳しい潔癖な姿勢を示したという話は、あまりにも有名である。

名月や北国日和定めなき 芭蕉
春も亦北国日和定めなき 虚子
昭和二十四年四月、高浜虚子は能登に旅をした。このとき、虚子
の念頭には、『奥の細道』において、芭蕉の敦賀にて詠みし「名月
や」の句があったのだ。八月十五日望の夜の月を待みにしていた芭

松が過ぎてからの急速な時の流れを意識しての句であり、第二、第
三句は虚子の類想句ということになるうか。表現の形態が変化した
ものである。比奈夫氏の句は「松過といふ刻も」と「も」の一と文
字のあることによって、松の内と松過ぎとをことさらに区別したの
でなく、松の内もどんとどんと時が経過し、松過もまた刻が流ればは
めたという時の経過に意を留めた句であって、この句の内容は似て
非なるもので、類想、類似、類型になるとは見られない。

私は常日ごろ、先人の句をはじめ、数多くの俳句を目にしている。
頭の中にしっかりと記憶した句もあれば、何となく意識の中にとど
められたという句も多いことだ。

赤木駿介氏は「類句面白し」という表題で昨年四月「淡々」二巻
二号に一文を寄せている。「発生の原因とその解明」の項に、ま
ず五木寛之のベストセラーの一つである『戒厳令の夜』の書き出し
を引用している。その中に「デジャヴ」^①という言葉が登場する。
日本語に訳すと「既視感」ということで、誰にでも覚えのある現象
なのだが、はじめて出会う情景や人物なのに、なぜか以前に見たこ
とがあるような気がしてならないという、その錯覚を「デジャヴ」^②
^①というのだそう。

私が句会などで選句に当たるとき、このデジャヴ^②既視感に突
き当たすることはしばしばである。初学の人の場合は、この既視感を
振り捨てないことには選句ができないことが多いので、俳句として
成り立っておれば取ることにしている。明らかな剽窃、盗み取りで
ないかぎり、既視感の分まで排除しては、句作意欲が削がれて
しまうように思う。しかし句作年数の五年、十年と経た人々の句会

蕉であったが、宿の亭主の言ったとおり、北国日和はあてにならない
かったのだ。虚子は芭蕉の「名月や」の句を踏まえて「春も亦北国
日和定めなき」と詠った。春もまた名月のころと同様、北国の日和
は定まらなかったのだ。この句は上五だけが異なるだけで中七、下
五全く同じ内容である。しかしこれを類句、類似、類型の句とは言
わない。存問の句なのだ。芭蕉に対する挨拶句なのである。和歌に
おける本歌取りである。

二 三子や時雨るる心親しめり(大7) 虚子
二 三子や時雨るる心親しめりと(昭55) 杞陽
虚子に心酔する杞陽は、吟行地にあつてしみじみとその掲出の句
を讃美し、虚子を讃美追慕したのである。そこで「と」一文字を付
し自分の句としたのだ。この句も存問の句。しかしこうした句はみ
だりに模倣してはならない。

松過の 又も光陰矢の如く 虚子
松過ぎてまた暦日のはやくなる 桜坡子
松過ぎの 堰切れしごと日流れ 佐藤 淑子
松過といふ刻もまた流れそむ 比奈夫
「松過」の掲出のこれらの句はどうであろうか。鷹羽狩行氏は本年
度の年鑑の「類想句と類似句」において、類想と類似句とを一緒に
することに問題ありと呈示し、△類想とは、表現以前の発想の段階
に属し、句の出発点である。一方、類似句は表現に関することであ
ろう△と言挙げしている。

掲出の第一、第二、第三句は松の内の緩やかな時の流れに反し、

の場合は論外である。

赤木氏はまた斯くも記す。スーパラーニングという学習方法の
ことである。ブルガリアのG・ロザノフ博士によってもたらされた
意見で、人間の頭脳は、膨大な情報量を記憶することができると言
い、博士が脳手術のとき、局部麻酔下でごく弱い電流を使って脳細
胞の刺激をなしたところ、患者達は長い間忘れ去っていた会話や歌
や冗談、子供時代の誕生パーティーでのやりとりまで、一言一句変
わらない録音再生をやつてのけたとか。人間の頭脳の記憶の素晴し
さを説いている。

またもう一つ赤木氏の傑作の話は、ある初心者の方の句会で、ある主
婦が八夏草やつわものどもが夢のあとと投句して指導者に窘めら
れた話である。本人は甲子園での高校球児を思つて句作し、芭蕉の
句とは全然知らなかったと言ふのだが、しかしこれは当人は夏草の
句を知っていたが、知ったことを全く忘れ去っていたのであって、
甲子園球場に球児の悲哀を感じたとき、昔々頭に入っていた芭蕉の
句があたかも自分の創作として再現されたのだと言ひ、類句の発生
というのは主にこれだと説く。そこで氏は「類句面白し」の一文を
書いたのだと。

これから俳句人口のますます増加する時代にあつて、類想、類似、
類句は殖えてゆくであろう。これをいかにして脱却するか。俳句
をあたかも組み立ててゆくのかのごとく形式から作つてはならな
い。写生をおろそかにせず対象を見つめ、自らの心の動きを大切に
生きた作品を作つてゆきたいものだと思う。

(註) 芭蕉の項、麻生磯次著『芭蕉物語下巻』参照。